

香取遺産

Vol.99

圓生涯学習課

☎(50)1224

扇島神楽隊あしまじんがくたい

緋色の陣羽織を羽織った
鼓笛隊



▲神幸祭でにぎやかに行進するおらんだ楽隊
(千葉県指定無形民俗文化財)

市の北部、肥沃な田園が広がる水郷地帯に、一風変わった芸能が伝承されています。あさぎ色の小袖袖に矢羽の袴、丸に扇の白紋を打った緋色の陣羽織のいでたちで、大太鼓を先頭に、小太鼓、笛がにぎやかにはやしなから行進する「おらんだ楽隊」がそうです。「おらんだ」といっても「オランダ」と直接関係があるわけではありません。はやしに洋太鼓を取り入れ、鼓笛隊風の編成を組んだことから、いつしか「おらんだ」の愛称がついたようです。ちなみに、楽隊の正式名称は「扇島神楽隊」といいます。

その起源は定かではありませんが、せんが、明治の初めころ、新政府軍の鼓笛隊員が扇島にあった本世堂病院（カッパから伝授されたとされる「十三枚本世堂」は、打撲によく効くぬり薬として江戸まで知られ、十三枚病院として打撲や捻挫の治療で名を博しました）に入院していた際、地区の人々が鼓笛を教えてもらい、神幸祭に参加するようになった。

たとの言い伝えがあります。香取神宮の式年神幸祭では、神宮から津宮、津宮から利根川を遡上し佐原へ入り、御旅所で一泊のち神宮へと戻りますが「おらんだ楽隊」はこの道中をはやす芸能の一つです。現在伝えられている曲は「ナミアシ」「ハヤアシ」「カケアシ」「ガイセン」の4曲があります。曲名からも行進曲が想定されますが、歩みを揃えるということはないようです。ただし「ナミアシ」|| 「歩く」、|| 「ハヤアシ」|| 「早歩き」、|| 「カケアシ」|| 「駆け足」という約束はあるようです。

先頭の大太鼓の踊りやはやしのメロディーからは「西洋音楽」というより獅子舞の道笛に近いように思われます。行列を先導する大太鼓や奇抜な衣装、当時の社会背景を具体化し、新しい要素を積極的に取り入れ、人々を驚かせようとする趣向は、風流の意識に通底するものといえるでしょう。「おらんだ楽隊」は、和洋の文化を融合させて郷土芸能化させた貴重な芸能です。